

映画「コスタリカの奇跡」を上映して

堀尾輝久（9条地球憲章の会代表）

3月24日、「9条地球憲章の会」と「コスタリカから学ぶ会」の共催、「SA9（9条を支持せよ）キャンペーン」後援で、念願だった「コスタリカの奇跡—積極的平和国家のつくり方」の上映会を持つことが出来た。私たちの会としては、会の発足1周年の記念事業でもあった。会場は、専修大学の長谷川宏先生のご好意で神田校舎の大教室。会場の広さに比べて来て下さる方はいかほどかと気をもんだが、ほぼ満席の150人近くの参加者に一安心。

映画はドキュメンタリータッチでコスタリカ平和憲法の成立からの歴史を描く。第2次大戦のあと国民解放軍のホセ・フィゲーレス・フェレル達らは内戦を制し、自ら武器を放棄し（1948年）、常備軍を撤廃する画期的な憲法を作り（1949年）、平和の国づくりに取り組む。日本の戦後史と重なるその後の70年の歴史は、内からの抵抗と外からの干渉のなか、軍事費を福祉と教育に回し、豊かな自然環境を活かす政策は民衆に支えられて根付き、いまでは世界でトップレベルの国民の満足感、幸福度の国として認められている。

この間アメリカからの圧力や干渉は繰り返され幾度も危機にさらされるが、特に80年代、レーガン政権の圧力に対して、モンヘ大統領は渡欧し、各国首脳に支援を訴え、「永世中立」宣言を行い（1983年）、平和憲法を根付かせる国際関係づくりに成功する。

アリアス大統領は中米地域の紛争解決にリーダーシップをとり、ノーベル平和賞を受賞する（1986年）。パナマやハイチの非武装化にも貢献した。これら優れた大統領たちの肉声が聞こえるのもこの映画の魅力である。

イラク戦争への支援を求めるアメリカからの圧力に屈しそうな政府に対して、憲法裁判を起こして勝訴した若い弁護士ロベルトさんの熱弁も映し出される。彼らは隣国ニカラグアの国境干渉に対しては、国際司法裁判所に提訴し、勝訴に導くことにも貢献した。平和を守るための法律家の果たす力の大きいことも感じさせられた。なおロベルトさんとは昨年東京でのシンポジウムでお会いし、私たちの会の賛同者にもなっていたいただいた仲でもある。

しかし、この映画の真の主人公はこれら英雄達ではなく民衆である。働く人たち、子どもたち、そしてその自然と共にある生活である。これは監督の言葉でもある。

この映画はコスタリカの政府筋がつくった宣伝映画ではない。実はアメリカの若い2人の研究者（マシュー・エデー、マイケル・ドレリング）が現地の歴史と現在を調べて脚本を書き、監督した作品なのだ。その言葉の中で、アメリカのサンダースの支持者には北欧の社会民主主義を理想とするものがあるが、そのモデルはすぐ近くにあるではないか。コスタリカがあるではないか。こういう思いでこの映画を作ったのだという言葉があった。（『シネ・フロント』339号参照）

映画を見終わって（実は2回目だが）、まさしくアメリカの人たちに、そして日本の人たち、憲法をないがしろにする人にも、平和憲法を守ろうとする人たちにも見てほしいと思ったのだった。

映画の後、ローラ・エスキベル（Laura Esquivel）コスタリカ大使の講演があり、映画に重ねてコスタリカの現在への理解を深めることが出来た。とりわけ、充実した福祉、医療、教育のもとで「子どもたちこそ力」であり、子どもたちの平和を求める気持と政治への関心が伸びやかに育っているという話には心をうたれた。ローラさんは若い女性弁護士でもある。そういえば国連での核兵器禁止条約の委員会の中心はコスタリカの女性、ホワイト議長だった。私たちの運動も若い、女性の力が不可欠なのだったことだった。

今回の映画会には、老若男女の多様な参加者が来られたことはうれしかった。なかでも異色はコスタリカ国立オーケストラ桂冠指揮者のまだ若い小松長生氏が参加され、コスタリカの音楽文化についての目を開かされたことだった。小松さんは大使とも交流されていた。なお小松さんは私たちの会の呼びかけ人のひとりで、私の属する東京フロイデ合唱団の第9の指揮者でもある。

映画と講演の後、「コスタリカから学ぶ会」の共同代表児玉勇二さんと「9条地球憲章の会」からは代表の私がそれぞれ短い感想をのべ、その後、主として大使への質問と交流があつて、盛会のうちに会を閉じることが出来た。地球平和憲章を創る活動にとって、北東

アジアとの連帯と共にコスタリカとの交流の重要性を強く感じた会であった。通訳された「コスタリカから学ぶ会」の星野弥生さん、『シネ・フロント』編集長の浜田佳代子さん、準備をされた2つの会の事務局の方々、後援してくださり、当日も3人が参加して下さった「SA9キャンペーン」のみなさま、ありがとうございました。

